

バスは成都に向かって走りつづけ、最後の小休止の為に街道沿いの休憩所に車を止めた。時計の針は既に4時を回っていた。休憩所といってもトイレと小さな売店があるだけの場所だ。車でしか移動手段の無い四川省山間部の街道脇にはこの手の休憩所があちこちにあり、乗客がトイレに行っている間に休憩所の人長いホースで引いた水の水圧とデッキブラシで手早く車の汚れを落す。停車時間はせいぜい20分くらいだろうか。

トイレを済ませた私は、その辺をぶらぶらしてバスの発車を待っていた。かなり暑かったこともあり売店のアイスクャンディーに群がる中国人につられて、私も緑豆のアイスに手を伸ばしてみた。甘いものが好きでない私は今までアイスなど買った事がなかったのだが、それは予想外に美味しかった。口の中に広がる控えめな緑豆の甘さが旅の疲れを優しく癒してくれる様で心地良かった。私は昨夜の事や朝の一件で今回の小旅行にはかなり満足していたし、楽しかった記憶を反芻しながら満ち足りた気持ちでアイスクャンディーの味を楽しんでいたのだ。とても平和な気持ちだった。

売店の横では小さな屋台に土産物をならべていた。売っている土産物には全く興味がなかったが、バスの乗客である中国人男性が置いてあった石を手に取り、ちょっと眺めてから台にもどすのが私の視界の隅に移った。

あまり人からは理解されないが、私は石が好きなのだ。旅に出た時など土産物は買わなくとも綺麗な石が落ちているのを見つけると、多少重くても拾って帰ったりするのが常だったので、土産物屋においてある石とはどんなものかと興味を引かれた。

それは、並べられている土産物の中にコロンと一つだけ置いてあった。取り上げてみてハッとした。川原に落ちているような丸いすべすべした石なのだが、石の表面には白く龍の様な模様が浮き出していた。裏返して見ても指で摩ってみても、描かれているものではなくて石自体の色がそのような模様を作っているように見えた。

「・・・？」

しかし、自然が作った模様にしては、それはあまりにもハッキリと龍だった。土産物として売られている事自体も胡散臭く思われ石を台に戻してその場を離れようとしたのだが、妙に気になってしまい離れられない。つい、再び取り上げ眺めてはまた戻すという行為を何度も繰り返しているうちに、店員が「欲しいのか？」と聞いてきた。

その時点で私はこれを買おうという気持ちは全く思なかった。が、念のために聞いておこうというような気持ちで値段を尋ねると20元という事だった。中国人にとっての価格としてはともかく、日本円にしたら300円程だ。拍子抜けするほど安い金額に思えた。

もし自然の模様で龍が浮き出しているのならそんな金額で売っている訳がない。それよりも、こんな場末の土産物屋で売られている訳がないのだった。そう思う反面、そんな金額で買えるなら、買っていいなという気持ちもチラッと涌いた。その瞬間、バスの運転手の「出発するぞ〜！！」という呼び声が響いてきた。私は反射的に手に持っていた石を置くと、バスに戻った。背後から「要らないの〜！？」という叫び声が聞こえていたが、私はバスに乗り込み自分の席に座ると直ぐにバスは発車した。

その瞬間に私は後悔し始めていた。たった20元程度なら買って良かったんじゃないの〜？

もしかしたら店の店員がどこかの川原で拾ってきて、面白いから並べていたのかも？さっきまでの平和な気持ちは一気に消し飛んでしまった。今更、あの石が欲しくて堪らない気持ちになってしまったのだ。もう石が本物だろうと偽物だろうとかまわらない気持ちだった。

ここで降りしてくれ〜！と叫びたいほどの後悔がこみ上げてきたが、どうしようも無い。諦めるしかなかった。…が、諦められない気持ちがムクムクと湧き上がってきてしまった。こうなると私は自分の気持ちを自分でもコントロールできなくなってしまう。『もう一度ここにあの石を買いにこようか』という馬鹿げた思いつきが心をかすめるとその思いを打ち消す事ができなくなってしまう。そう思った時から私は必死にバスの外の風景を見つめ、あたりの景色を記憶に留めようとした。左側の車窓には岷江のどんよりとした川面が見えていた。

丁度、隣の席に座っていたお兄さんの膝のうゑに四川省の交通地図が乗っていたので見せてもらい「今どこですか？」と尋ねと、「今はこの辺だよ」と指し示してくれた地図上には『汶川』という地名が記されていた。さっきまでの爽やかな気持ちとは裏腹に、悶々とした気持ちをかかえた私を乗せてバスは成都に戻ってきた。時計をみると7時だった。

バスターミナルから出る前に、チケット売り場に立ち寄って、バスの行き先の地名に汶川という名があるのを確認した。チケット代は38元だった。20元の石を、片道38元のバス代を払ってまで買いに行くなんて、どう考えても馬鹿げている。とにかく今日一日ゆっくり休んで、明日の朝、気が変わってなかったら行くことにした……。

自分の気が変わる事を願いながら眠りについた私は、翌朝目覚めると、まったく気が変わっていない事を再確認し、旅の疲れも癒えぬままに再び長距離バスターミナルに向かった。

汶川までのチケットをかうとバスに乗り込む。つくづく自分はバカだなあと思うが、こんな酔狂な事をワザワザできる人間はそうも居まいと思うと愉快的気もした。あんな街道沿いに無数にある休憩所が見つけれられる確証も無かったが、それがかえって宝探しに行くようなワクワク感を感じさせていた。手がかりは、汶川という場所の近くである事。岷江沿いの道であった事。昨日の成都到着時刻から考えると時間的にみて2時間半から3時間くらい走った場所の距離にある筈だという事だ。

目当ての休憩所が見つけれられたところで、私の乗っているバスがそこに停車しない限り、どうやってそこまで行けばよいのかも迷うところだった。一応の計画としてはとりあえず汶川まで行く。長距離バスが停車するような場所なら、タクシーかミニバスくらいはあるだろうから、汶川からそれに乗って休憩所まで行き、帰りはその休憩所に停車した成都行きバスに途中乗車して帰る。という感じだった。

走り始めてからおよそ2時間が経過した。そろそろ現場に近づいている筈だ。バスはどんよりと陰気な川面を光らせる岷江に沿うように走る街道に入っていた。中国のドライバーは道さえ空いていればカーブの連続する崖道だろうとお構い無しにかなりのスピードで飛ばしていくので、風景は一瞬にして後方に流れ去ってしまう。勝負は一瞬だ。

車窓の風景が昨日私が必死に見つめていた風景と重なるようになってきた。私は目を皿のようにして、街道沿いの休憩所を一つ一つ確認していると、見覚のあるトイレの建物が見え、売店の脇にはお土産をならべた屋台の姿が、一瞬窓の外を流れていった。

「ああ～!! 見つけた～！見つけた～！！なんだ結構簡単に見つかったじゃん！！」

喜びもつかの間、目あての休憩所はどんどん後ろへと遠ざかっていく。

またしても「ここで降ろして～！」と叫びたい気持ちだったが、躊躇している間に通り過ぎてからずいぶん走ってしまった。仕方がない。とにかく汶川まで行ってから作戦を考えよう。もう、そう遠くはない筈だ。一人ヤキモキする私を乗せて、バスはそこから15分ほど走ったところで別の休憩所に停車した。あれれ？ 汶川が直ぐ近くにあるのならば休憩所に停まる訳がない。

「汶川にはまだ着かないの？」

上半身裸になって、タバコをふかしていた運転手に尋ねると、彼は首を横に振った。

「まだ、だいぶある」

ええ～！？そんな筈じゃ…そうか、あのお兄さんの持っていた地図は縮尺が大きいものだったんだ～！今頃そんな事に気がつくなんて～！

「じゃ、この辺にタクシーはありませんか？私は降りたい場所を通り過ぎてしまったの。」

「こんなところにタクシーなんて無いよ。」

「じゃあ、反対方向に戻るバスに乗り換えたいんだけど」

「この辺でバスに乗れるところなんて無いさ。とにかく汶川まで行くんだな。そこで帰りのバスの切符を買いな。もう出発するぞ」

目的の場所を見つけてしまったからにはこれ以上前に進むのは嫌だったが、街からも遠く離れた道に一人途中下車する気にはなれなかった。仕方なくもう一度バスの座席に戻って、ひたすら汶川に到着するのを待った。

汶川にはなかなか着かなかった。バスは相変わらずどんよりと流れる岷江に沿った埃っぽいガタガタ道をいつまでも走り続け、灰色にくすんだような風景は眺めても少しも楽しくなかった。不安が怒りに変わり、怒りが諦めになる頃やっと街並みの中に入り汶川に到着したのはなんと、あの休憩所を見つけた地点から3時間も走ってからのだった。さすがにグッタリだが、すぐにチケットを買い直して成都方面にトンボ帰りである。帰り道では少し気持ちに余裕ができたため、車窓を過ぎる村や街があると建物の看板を見つめて、その土地の名前を探し、手持ちの交通地図と照らし合わせて見た。今までつまらなく思えた道もこうして見ると少しは親しみが湧いてくる。旅行者には見向きもされないローカルな街の名前を知る事によって、自分と四川省の距離が縮まるような気がした。元来た道を再び三時間走り、往路で休憩をとった場所の近くまで戻ってきた。そのあたりの地名は『映秀』というらしかった。

そこから約15分、やっとの思いで戻った目的の休憩所は既に店仕舞いしていた。朝から6時間かけて汶川まで行き、3時間かけてここまで戻ったのだ。時間はとっくに6時を回っている。今日はただ一日中意味もなくバスに乗っていただけで終わってしまった。今日の勝負は完全に私の負けだ。このままじゃ引き下がれない。明日もう一度出直してやる！ 私はこの馬鹿げた宝探しに完全にムキになっていた。

翌日の朝、再びバスターミナルへ向かう。

私はいったい何をやっているのか。元々ピサが出るまでの時間つぶしだった筈の旅がまだ終わっ

ていない。ピサは金曜日には発給されている筈だったが、松藩から成都に戻ったのは土曜日で、今日は既に月曜日だ。本当なら今日はピサを公安に受け取りに行く筈だったのだ。あれから二日経って、龍の石がまだ売れずにあの休憩所にある保障もない。だが、もうこの事にケリが着くまで、成都を離れる事ができない気持ちになってしまっていた。自分で考えてもつくづく馬鹿である。だがこんなくだらない事でも、やりたいように自由やるのが私流の旅なのだ。

今日は映秀までのチケットを買った。22元。もうすでに何度も通っているこの道には親しみさえ感じられる。休憩所探しも二回目ともなれば難なく見つけられた。もう昨日の二の舞は踏まない。休憩所のそばまで来たところで私は席を立ち、じりじりとバスの降車口のある前方に移動した。絶対今日中に決着をつけてやる。休憩所の前に着いた瞬間に大声で叫んだ。

「我要下車～！！！」

車掌と運転手はビックリしたように私を見ると「まだ映秀じゃない！ここで降りても何も無いんだぞ」と慌てていたが、構わずバスを止めさせて下車することができた。やったあ！去って行くバスの窓からは他の乗客達が訝しげに私を見下ろしていた。みんなが怪しむのも無理は無い。私の下りた場所は片側は山。片側は崖。街からも遠く離れた本当に何も無い場所なのだ。あの休憩所を除けば。

車がゴンゴン走り抜ける道のガードレールに張り付くように歩いて100メートルほど戻ると、苦勞に苦勞を重ねてやっと戻ってこれた休憩所だ。街から遠く離れた炎天下の道路からフラリと歩いて入ってきた女を見て休憩所の人達がギョッとしたように私を見ていた。が、私はそれどころでは無かった。

あの龍の石はまだここにあるのか？もし無かったらこの二日間の苦勞が水の泡だ。緊張のあまりすぐには確かめる事ができず、先ずトイレに入って心を落ち着けた。トイレの使用料は5角。約7円。トイレから出て恐る恐る屋台の方に向かうと、土産物の中に石が一つだけゴロンと転がっているのが遠くからも見えた。やった～！！まだ有る～！！

小走りで駆け寄り石を取り上げた。

「！？」

私の取り上げた石に浮き出ている模様は、鹿だった。

「……………」

予想外の展開に思わず固まってしまう私なのだ。

「買う？」

石を握ったまま見つめている私を、店の女の子が奇妙な物を見るような目で見つめながら声をかけてきた。

「いくら？」

「80元」(ゲッ…！)「高いね」

「これは珍しい物なのよ！自然にこんな模様が浮き出してる石なんだから。これ一つしか無い物よ！」

思わず苦笑してしまった。

「龍は無いの？」

女の子は一瞬言葉に詰まったが、

「あなた買うの!? 買うんだったら探してあげてもいいわ」

と言うと、照れくさそうな顔をして店の奥のダンボールから石がゴロゴロ入った袋を取り出し、龍の模様が入った石を探し出すと私に渡した。

それはまさしくあの時に私が見た龍の石だ。有ったんだ〜! この石が本物だろうと偽物だろうと構わないくらいの愛着が湧いていた。私は先ほどの彼女の言葉を無視して言った。

「これ20元だよ。買うよ。」

彼女はまた照れくさそうな顔をして「いいわ」と頷いた。その値段でも十分すぎるほどの利益があるに違いない。石を受け取るとそっとズボンのポケットに入れた。手に入れられた喜びと安堵で力が抜けてしまった。石さえ手に入れてしまえばもう用事は無いのだが、二日がかりの苦勞の末にやっとの思いで辿り着いた場所だ。すぐに帰ってしまうのでは勿体無い。休憩所の生活にも興味がわいたのでしばらくここにいる事にした。

「あんた、どこからやって来たの？」

休憩所のおばさんが話しかけてくる。

こんな場所に外国人の女が歩いてやって来たのだから不思議に思うのも無理は無い。しかし石を買うために成都からバスに乗ってきたと言うのはさすがに少し恥ずかしく、言葉が上手く話せないふりをして誤魔化してしまった。

おばさんも深くは詮索せず、

「疲れてるでしょ? ちょっと休憩していきなさいよ」

と土産物屋台の脇にあった椅子を勧めてくれた。

その時、大型の観光バスが2台続けて休憩所に入ってきた。とたんに今までのんびりしていた休憩所の雰囲気が一変、鉄火場が変わった。どっとバスを降りてくる乗客の群れを相手にトイレ使用料の徴収、ジュースやアイスクリーム、土産物の販売とてんでこ舞だ。男の人達はいっせいにデッキブラシとホースを担いで走り、バスの洗車を始める。バスの停車時間は短い、その間は猫の手も借りたいほど忙しい。そしてバスが行ってしまうと、時間の流れもとたんにゆっくりに戻るのだ。その変わりようがあまりに激しくて可笑しかった。

父、母、娘、息子の4人家族でやっているらしいこの休憩所はなかなか良い商売になっているようだった。しばらく見ていると、かなりの頻度で観光バスはやって来るのだ。5角のトイレ使用料は、停車したバスのほとんどの乗客が利用する事を考えれば、一日の徴収金額は結構なものになるに違いない。街で通常1、5元程度で売られているペットボトルの水はここでは5元。5角程度のアイスが2元。それでもバスが着く度に飛びように売れていく。対応が追いつかないほどだった。私から見ればチャチなプレスレットなどの土産物も、10個単位買っていく中国人観光客が少なくない。きっと旅のみやげだと知人に配るためなのだろう。

土産物屋台の横に座っていた私を店員だと思い込み、「これいくら!?」「ちょっと負けなさいよ!」と声をかけてくる観光客もいた。土産物の値段は簡単に10元と20元の物があるだけだった。見ていたら直ぐおぼえてしまい、私にもわか店員に早変わりだ。店の女の子がそんな私をみて苦笑する。

お客が引けた合間に女の子やお母さんと話をした。「儲かってるね」と言う、女の子はお金を数

えながら「まあね」と笑った。なかなかやり手そうだ。気が強そうなキリッとした美人だ。お母さんに「娘さんは美人だねえ」というと自慢げに頷いた。

この場所の名前を聞くと『百花』という地名だと教えてくれた。持っていた地図で確かめると白花と書いてある。中国語の発音ではどちらも「バイホア」と読むのだが、どちらが正しいのだろう。壁に貼ってあったこの土地の連絡表のようなチラシにも百花と印刷されていたので、おそらく地図が間違っているのではと思ったが確かめ損なってしまった。いずれにしても、この旅での忘れられない地名になる事には違いない。

お母さんがキュウリを剥いて、食べなさいと勧めてくれた。「どうやって成都に帰るつもり？」と心配してくれるが、私は帰りの方法については全く問題にしていなかった。この休憩所にはひっきりなしに成都行きの観光バスが立ち寄るのだ。空席のあるバスにお金を払って乗せてもらえば問題なく安全に帰る事ができるはずだ。

休憩所に来てから二時間近く経とうとしていた。休憩所の人とも仲良くなって立ち去り難いが、暗くなる前に成都に帰る為にはそろそろ戻ったほうが良さそうだった。ちょうど成都行きの観光バスが休憩所に停車し、運転手が売店の中に入ってきた。店の人達と親しいらしく、店のお母さんが運転手にもキュウリを剥いて差し出した。

「あなたのバスに空席はある？」

話しかけてみると運転手は首を横に振ったが、お母さんが「この子、日本人なんだけど帰る車がないのよ。乗せて行ってやってくれない？」と口添えしてくれると、運転手のおじさんも「そういうことなら任せときな！」と胸を叩いた。四川省の中国人で優しいなあ～。この旅が始まってから何度も感じたこの言葉が胸の中に浮かんだ。

一服した運転手が立ち上がり、私は休憩所の人に別れを惜しんでバスに乗り込んだ。客席は空いていなかったで、私の席は運転手の脇の車掌席だ。車高が高い大型観光バスの最前列は最高に気持ちいい。私は凱旋将軍の気分だった。ちょっと手間取りはしたが宝探しは大成功だ。時間とお金を浪費し、疲れもしたが、普通に買っていたら味わえなかったような経験と思い出が残った。私流の旅ではそれが重要な事なのだ。似非物の龍の石はこの旅の戦利品だ。嬉しさに思わず石に頬擦りしてしまった。何度もズボンのポケットを撫で、石がちゃんと入っている事を確かめながら帰った。

それにしても、このバスの運転はものすごい。片側が崖の急カーブが続く道をすごいスピードで飛ばし、少しでも遅い車が前方にしようものならカーブの前だろうと、トンネルの中だろうと派手にクラクションを鳴らしながらガンガン追い越していく。運転席の脇に座っていた私は生きた心地がせず、思わず神様に祈ってしまった。無事に成都まで帰れますように～！！ひ～！（涙）

運転手のおじさんはシャツをはだけた腹出しスタイルで、公共の乗り物の運転手というよりは工事現場のダンプの運ちゃんだ。私が内心神様にお祈りしているとも知らず、俺って運転上手いだろう？というように時々私の方をみて得意げな顔をする。きっとこの人は「公共の安全」とか「人命を預かる責任感」についてなど考えた事もないんだろう。

が、一応腕の方は確からしく、かなりきわどい運転ながらもバスは無事に成都のバスターミナルに到着した。生きたまま成都に帰れたことを神様に感謝しつつバスを飛び降りると、運転手に「いくら払えば良いの？」と尋ねたが、彼はそれには答えず何やら奥歯に物の挟ったような物言いでごニョゴニョ言っている。何度も聞き返しているうちに、私の手を握ってきて、どうやら「今晚俺と

付き合ってくれ」と言ってるらしい事がわかった。

ちょっと～！おじさん！ たかが、ちょっとバスに乗せただけでそれはあつかましいんじゃないの～！？まったく、今まで親切な人にばかり会っていたので安心していましたが油断大敵だ。私は言葉がわからないふりをして、映秀までと同じバス料金の22元を無理やりおじさんの手に握らせると、手を振ってバスターミナルを後にした。

成都の宿に戻ると大事な石を取り出し、改めて眺めてみる。見れば見るほど人工的に細工された物なのが見え見えの石だった。何故これを自然にできた模様かもしれないなどど思ってしまったのだろう。しかし私にとっては宝物だ。失くしてしまうのが怖くてベット脇の貴重品入れの中に大事にしまって鍵をかけた。

これでもう思い残す事はない。明日は公安にピサを受け取りに行き、成都を旅立とう。とっても満足な夜だった・・・。(続く)